

明治期における日本銀行の建築設計組織 および設計者と出身学校

北海道職業能力開発大学校 駒 木 定 正

The architecture design organization, designer, and graduation school of
the Bank of Japan in the Meiji era

Sadamasa KOMAKI

要約 日本銀行本店は、日本人建築家（辰野金吾）がわが国で最初に設計した本格的な古典様式建築として明治29年に竣工した。辰野金吾を筆頭とする日本銀行の建築設計組織は、本店の設計から大正元年7月の解散まで、主要都市に本支店および出張所を設計・建築した。

そこで、本稿は明治期における日本銀行の建築設計組織と設計者の変遷およびその出身学校をとらえ、本店をはじめとする一連の本支店・出張所との関連を考察するものである。

研究の結果、日本銀行の建築設計組織は一貫して辰野金吾の影響下にあり、組積造本館（本店、西部支店、大阪支店、名古屋支店、京都出張所、小樽支店、福島支店）の建築時期に照応して帝国大学、東京職工学校、工手学校などの卒業生によって編成されたことが明らかにした。

I 緒 言

本論文は、明治期における日本銀行の建築設計組織と設計者および出身学校をとらえ、本店をはじめとする一連の支店・出張所の新築との関連を明らかにする。

明治期における日本銀行の建築設計組織は辰野金吾を筆頭に本店（明治29年竣工）の設計にはじまり一時解散（大正元年）にいたるまで、主要都市に一連の支店および出張所を設計・建築した。

日本銀行本店を先学の村松貞次郎は、「明治時代の建築を代表するものとして第一にあげられる」^(注1)と評し、同じく藤森照信は辰野の全作品を系統化した上で中期古典系様式の完成体と位置づけて論考している^(注2)。本店以降の日本銀行における建築の発展過程は支店と出張所の建築に見出されるものと推察され、また、それはとりもなおさず辰野金吾を中心とした明治期の主要な建築設計組織による建築の系統とその影響を究明する手がかりになると類推される。

そこで本研究は明治期日本銀行の建築に関して、拙論「日本銀行小樽支店（明治45年）の主要構造と仕様」^(注3)に続いて発表するものである。本論文では次の4点を論述する。

- 1) 日本銀行本支店と出張所の建築概要について
- 2) 日本銀行の建築設計組織とその変遷について
- 3) 辰野金吾を筆頭とする設計者の陣容について
- 4) 技師等の出身学校にみる学卒者の陣容について

II 明治期日本銀行本館の構造、規模と建築費

明治期における日本銀行本支店と出張所の新築は、東京本店に始まり小樽支店および福島支店^(注4)で終えた（図1～8、図10）。その各本館の建築構造は、組積造と木造に大別できる。組積造の本館は本店、西部支店（門司）、大阪支店、名古屋支店、京都出張所と小樽支店および福島支店の順に建ち、木造の主な本館



図1 日本銀行本店
(日本銀行蔵)



図2 日本銀行本店附属第二
(建築雑誌、第147号)



図3 日本銀行西部支店
(日本銀行蔵)



図4 日本銀行大阪支店
(日本銀行蔵)



図5 日本銀行名古屋支店
(日本銀行蔵)



図6 日本銀行京都出張所
(京都文化博物館蔵)



図7 日本銀行小樽支店
(日本銀行蔵)



図8 日本銀行福島支店
(日本銀行蔵)

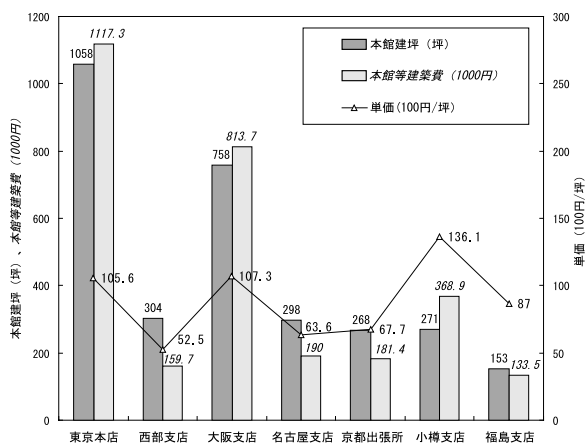


図9 明治期日本銀行の組積造本館建坪と建築費総計

〈参考文献〉『日本銀行沿革史 第十卷』(大正2年、復刻昭和51年)、『新築費決算家屋金庫へ組替の件』(『営業所新築に関する書類』、大正2年1月9日、日本銀行蔵)、『日本銀行福島支店旧行屋(解体)調査報告書』(福島市教育委員会、1980年)

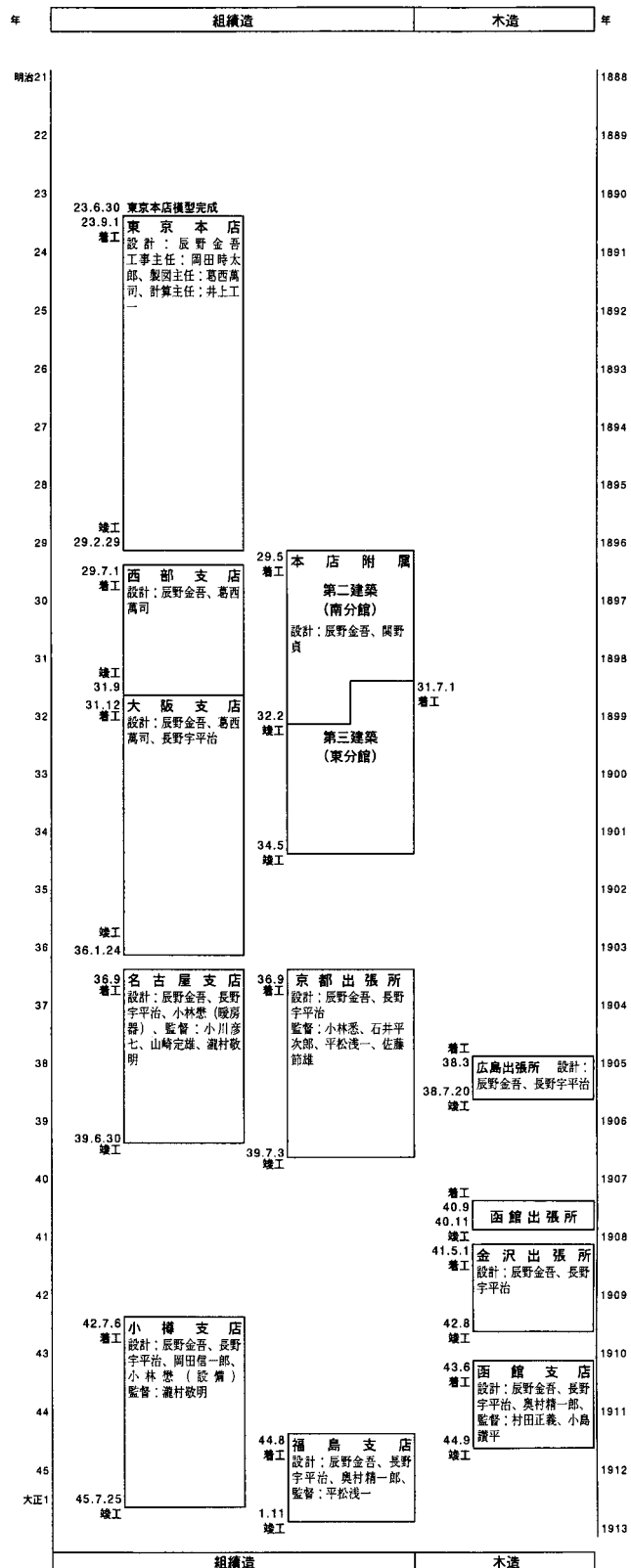


図10 明治期日本銀行の構造別(組積造・木造)建築一覧

〈参考文献〉

「落成式挙行に関する書類」(『営業所新築に関する書類』、明治44年11月18日、日本銀行蔵)、『日本銀行沿革史』(大正2年、復刻昭和51年)、『建築雑誌』(第65、112、137、142、145、194、219、227、235、236、239、300、310、333、348号)

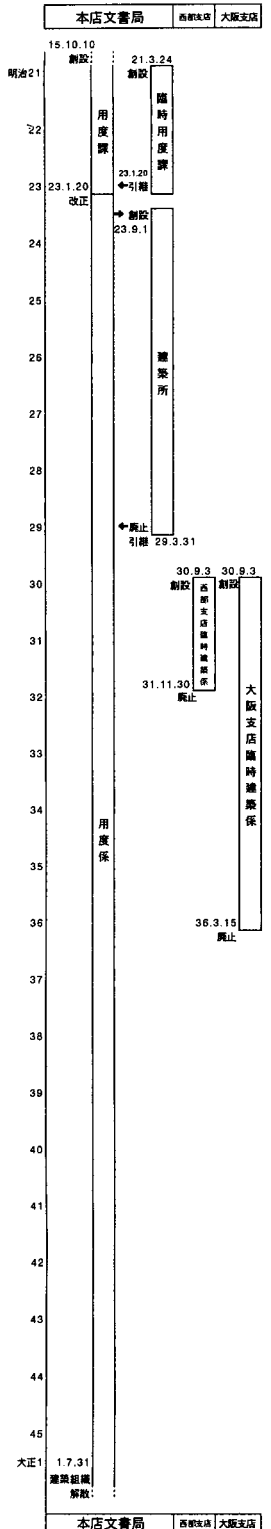


図11 明治期日本銀行の建築設計組織

〈参考文献〉
『日本銀行沿革史 第一巻』
(大正2年、復刻昭和51年)

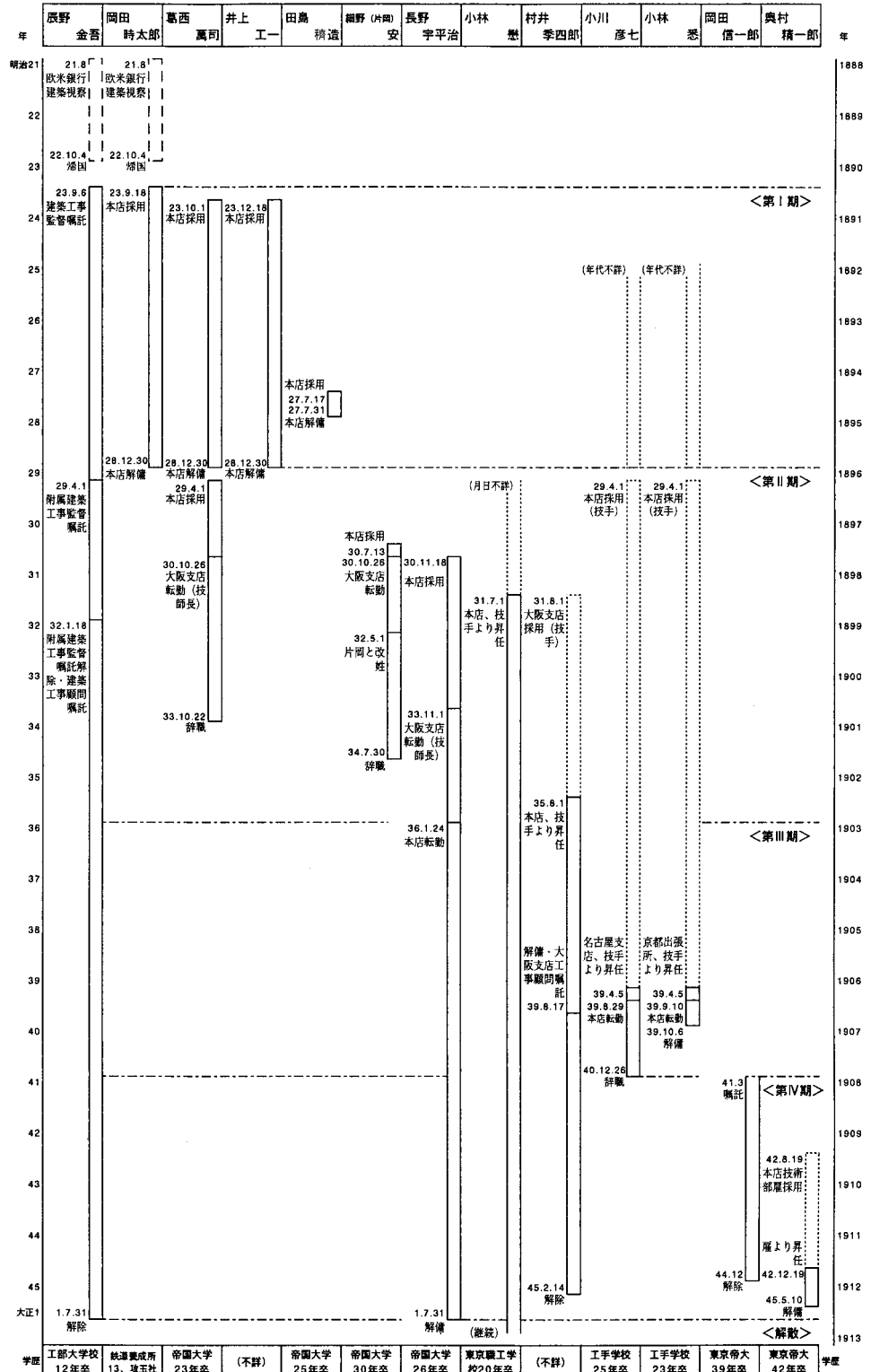


図12 明治期日本銀行の建築工事顧問と技師等一覧

〈参考文献〉『日本銀行沿革史 第十巻』(大正2年、復刻昭和51年)、『日本銀行建築譜』(昭和3年)、『蔵前工業会誌』(昭和4年)、『工手学校卒業生名簿』(大正14年)、『建築学会会員住所姓名録』、清水慶一『明治期における初等・中等建築教育の史的研究』(1982年、私家版)、『日本之精華』(大正3年、毎日通信社)ほか。

〈注〉一部、日本銀行の協力を得て作成。小林悉と小川彦七は本店建築所技手の記録(年代不詳、『日本銀行建築譜』)。「鉄道養成所」は「鉄道局工技生養成所」の略。退職事由の記載は明治40年まで『日本銀行沿革史』にもとづき、以降はそれに準じて記す。

は広島出張所、函館出張所、金沢出張所、函館支店である^(注5)。

日本銀行が本館の構造を組積造と木造に分けた理由は、『日本銀行八十年史』^(注6)によれば、開設までの期間や物資・労力の状況に照応したためであり、広島出張所の木造本館は日露戦争で銀行代理店の都合により急に新築されたのである^(注7)。木造本館の工期は組積造よりも短く（図10参照）、建坪も同時期の組積造よりも小規模^(注8)である。

組積造の各本館の建築推移をみれば、着工から竣工までを区切りとしながら本店および支店・出張所が建てられていった。具体的にその建築推移を上げれば、本店本館に次いで本店付属^(注9)と西部支店、その完成直後に大阪支店の着工、続いて名古屋支店・京都出張所、さらに小樽・福島支店が着工・竣工する。この建築の推移は、日本銀行の建築設計組織と設計者の編成および建築技術の変遷を究明する手がかりとなる。

ここで、組積造本館の推移にもとづいて各建物の規模（建坪）と建築費（本館・金庫などの新築費総額）^(注10)の関連（図9参照）、および設計者の陣容（図10参照）に着目したい。本館の規模は、本店（1,058坪）が圧倒的に大きく、支店・出張所中では大阪支店（759坪）が群を抜き、建築費も両店は他を凌いでいる。これは、銀行の象徴性や営業規模からみても順当といえよう。

ここで注目されるのは、小樽支店の建築費（36万8,985円）と設計者（辰野金吾、長野宇平治、岡田信一郎）である。建築規模（271坪）は店舗中5番目であるが、建築費は本店、大阪支店に次ぐ3番目であり、名古屋支店の1.9倍、京都出張所の2倍、福島支店の2.7倍に相当している。さらに設計はわが国の近代建築界をリードした辰野・長野・岡田の3人が共同で設計した唯一の建築である。

小樽支店が建築された状況とその背景について概説を加え、日本銀行の建築と社会状況の関連について考察してみよう。小樽は中央から遠隔地にあり資材の輸送費がかさむ立地条件を勘案しても、他の建築よりはるかに高額な費用をかけて支店が建てられた。長野宇平治はこれについて、「此建築は当時で40何萬圓と云ふ工費で日本銀行支店中では大なる方であるばかりでなく、其当時では本邦での有数な大建築であった」^(注11)と述べている。小樽に「大建築」と呼ぶ支店を建てた背景には、日露戦争終結（明治38年）による樺太への資金輸送の拠点づくりと北海道における経済・金融上の地位があったと推察される^(注12)。このことは、小樽支店の営業取引高（大正7年）が大阪、名古屋、門司、

京都に次ぐ11億7千万円で京都（20億円）の58%にすぎなかった^(注13)ことでも裏付けられよう。

すなわち、この小樽支店の構造、規模と建築費および設計者の陣容をとおしていえることは、日本銀行は支店・出張所の建築にあたって単に取引高だけではなく建築時の社会状況と密接に関連しながらこれらを決定していたことが窺われるのである。

III 明治期日本銀行の建築設計組織とその変遷

日本銀行の建築設計組織は、本店を新築するため初めて文書局に編成され、明治末まで改変をしながら主要都市に店舗を建築し、大正元年7月31日に解散した。この解散は、小樽支店が竣工（明治45年7月25日）した6日後にあたり、福島支店竣工の4ヶ月前である。

日本銀行は、明治期に本店と西部支店および大阪支店を新築するため当該地に新築事業を取扱う臨時の事務分掌を開設したが（竣工と同時に廃止）、それ以外の新築では臨時事務所を設けず、本店の文書局用度係が建築に関する事務を総括した（図11）^(注14)。

本店の新築に関する組織でみれば、最初の建築事務取扱い分掌は明治21年3月24日に本店文書局に開設した臨時用度課である。その設置期限は、処務仮規定^(注15)によれば、建物が落成し業務の移転をもって閉鎖するとした。しかし、日本銀行全体の組織の再編（同23年1月20日）によって文書局用度係が諸建築営繕の事務を引き継ぎ、さらに同年9月1日には日本銀行建築所が一切の新築事務を取扱った。なお、同所は本店の竣工にともない明治29年3月31日に廃止されている。

次いで西部支店と大阪支店の両臨時建築係が明治30年9月3日に開設した。両支店建築の一切の監督および技術員（技師と技手）の進退黜陟は日本銀行工事監督が担当していた^(注16)。それぞれの支店の竣工により西部支店臨時建築係が廃止されるのは同31年11月30日、大阪支店は36年3月15日であった。

それ以降の名古屋支店と京都出張所の新築工事から大正元年の建築設計組織の解散まで、建築事務は本店文書局用度係が総括し、同係には建築の技術員が配属されていた。本店文書局の関与を小樽支店の新築関連文書で見れば、「文書局長」または「文書局用度係」との交信が確認され、その中には長野宇平治による設計の指示も見出される^(注17)。

日本銀行の建築設計組織の解散にともなう辞令の交付は、大正元年7月31日、高橋是清総裁から辰野金吾、

長野宇平治へ直接渡されたのである^(注18)。なお、文書局用度係の建築関連技術員の所属を「技術部」と称する記録が散見されるが、『日本銀行沿革史』『営業所新築に関する書類』等にはその記載がなく、正式な分掌であったかは今のところ確認できない^(注19)。

IV 建築工事顧問と技師の陣容

建築設計に携わった顧問と技師の陣容を本店および支店と出張所の建築と対応させて述べてみよう。辰野金吾は、唯一明治期における日本銀行本店新築以降の設計すべてに関与し、建築工事監督または建築工事顧問として建築実務を統率していた。

辰野のもとで設計および監督に携わった技師・嘱託の経歴を年代順に示したのが図12である。辰野は現場工事をおこなうにあたって、江戸時代からの旧慣にとられる老練な現場主任経験者を採用せずに帝国大学と工手学校の卒業生らでその陣容を構成し、竣工まで至らしめた。このことについて、曾禰達蔵は当時の施工現場の状況を勘案し「是は確に建築施工上の一大革新であった」とその業績を記し^(注20)、その後、建築現場に学卒者が進出する契機になったことを評価する。

西部支店の設計は辰野金吾と葛西萬司、大阪支店ではこれに長野宇平治が加わり、それ以降の支店・出張所の設計は、辰野と長野に加え次に示す技師または嘱託が参画する人員構成であった。名古屋支店では小林懋（暖房器設計）^(注21)、小樽支店では岡田信一郎（身分は嘱託）と小林懋、福島支店では奥村精一郎である。さらに、そのもとに技手が配され、実施設計および現場監督にあたっていた。

技師等の陣容とその沿革は4期に大別され、組積造各本館の建築時期に照応する。

第Ⅰ期の陣容は本店を建築するために構成され、第Ⅱ期は大阪・西部支店新築で再編、第Ⅲ期は名古屋支店と京都出張所、第Ⅳ期は小樽支店と福島支店の新築に対応している。

第Ⅰ期（明治23年～28年）の本店新築に際し、辰野金吾のほか岡田時太郎、井上工一、葛西萬司が明治23年に採用され、辰野以外は竣工間際の明治28年末日をもって解僱になる。なお、これに先立つ明治21年から22年には辰野と岡田が欧米の銀行建築の視察に派遣され、設計案を構想している。

第Ⅱ期（明治29年～36年1月）は、支部支店と大阪支店を建築するための再編期である。葛西萬司は再雇

用されて技師長となり、細野（片岡）安と長野宇平治が大阪支店に配属された。村井季四郎は技手として大阪支店で採用され、35年8月に技師に昇任、39年には大阪工事顧問嘱託となる（45年嘱託解除）。小林懋は設備関連の専門技術者であり、技手から初めて技師に昇任（明治31年7月）した。

第Ⅲ期（明治36年1月末～40年）は、長野宇平治の東京転勤後から小川彦七の退職までであり、この期の技師は、前任技師（長野宇平治、小林懋、村井季四郎）に加え技手からの昇任者で構成された。名古屋支店の小川彦七^(注22)、京都出張所的小林悉はともに現場の監督を担当し、竣工の2ヶ月前に技師に昇任している。

第Ⅳ期（明治41年～大正元年）は、岡田信一郎と奥村精一郎の採用から解散までである。岡田信一郎は辰野金吾の推輓によって小樽支店新築のために嘱託として採用され、竣工（明治45年7月）の前年末に嘱託解除となり、また奥村精一郎は雇として採用（明治42年12月技師に昇任）され函館出張所と福島支店の設計を担当した。

大正元年に設計組織は解散したが、翌2年の技師であった者の在籍を日本建築学会会員名簿でみれば、長野宇平治は長野建築事務所、小川彦七は建築請負業、小林悉は住友本店技師、岡田信一郎は東京美術学校・早稲田大学講師、奥村精一郎は辰野葛西事務所に転じ、小林懋のみが日本銀行文書局技師として継続勤務している。日本銀行は設計組織に設備関連技術者（小林懋）を配し解散後も在籍させた点は、設備の専門知識が近代建築において不可欠であると認識していたことを示すものであり、建築設計組織の人員構成の推移を見るうえでも注目に値する。

辰野金吾と長野宇平治の日本銀行における主従関係は、設計業務の状況を窺い知るうえで参考になろう。小原友輔（明治33年勤務）によれば、辰野は実に厳格な態度で長野に指示を与え、長野は従順に仕事をしていたと、以下のように回想する^(注23)。

当時（明治33年ころ）辰野さんは工科学長だったが毎金曜日に（日本銀行へ）来られた、そしていきなり部屋に入って来ると遠くの方から長野さんと呼ばれる、そうすると先生（長野宇平治）のこりとやって行って辰野さんの前二三步前に直立する。何も無い時はいゝが大抵は小言を云われて居た、満足に帰る事はなかった。何をしているか馬鹿ッといきなり大聲でどなることが通例のやうであった。この小言も並大抵じゃない、足を踏む、舌打ちをする、博士の怒り方と云ったら夫れは甚だしいものであったが、それでも決して何も云はなかった、それで一言も反抗の言葉を出さなかった、これは博士（長

野宇平治) でなければ出来ぬことゝ現在に於てもそう思はれる。

V 技師等の出身学校について

明治期の日本銀行において辰野金吾の配下にいた建築関連の技師は11人、嘱託1人であった。その内で出身学校が判明したのは10人であり、帝国大学(明治30年6月に東京帝国大学に改称)の卒業生が6人、工手学校が2人、東京職工学校が1人および鉄道局工技生養成所・攻玉社(岡田時太郎は両校を卒業)が1人である。

学卒者によって編成された建築組織は、前述の曾禰達蔵の回想のとおり、辰野金吾の教え子である帝国大学卒業生を中心に構成され、一連の日本銀行建築を設計・建築したのである。

以下に日本銀行建築関連技術者の出身学校別の概要を述べる。

帝国大学(東京帝国大学)の卒業生は、葛西萬司(明治23年卒)、田島穉造(同25年卒)、長野宇平治(同26年卒)、細野(片岡に改姓)安(同30年卒)、岡田信一郎(同39年卒)、奥村精一郎(同42年)であり、中でも日本銀行技師長として直接辰野金吾の指示を受ける地位にいたのは、葛西萬司(技師長就任期間:明治30年10月26日～33年10月22日)と長野宇平治(同:明治33年11月1日～大正元年7月31日)であった。

また、辰野金吾は設計事務所を東京と大阪で開業するにあたり、帝国大学の教え子で日本銀行の技師であった葛西萬司、細野(片岡)安とそれぞれ連名で、辰野葛西事務所(明治36年開設)と辰野片岡事務所(明治38年開設)を設立した。また奥村精一郎も日本銀行を経て辰野葛西事務所に勤務させ、辰野の影響下において設計活動をおこなっている。このことから辰野金吾は、その設計活動において帝国大学を卒業し日本銀行で実務を経験した肝いりを呼び寄せたことが窺われるのである。

長野宇平治は明治26年に帝国大学を卒業し、明治30年に日本銀行に入行、大正元年の建築設計組織の解散まで永続勤務した。とくに、明治33年からは技師長に就任、辰野の右腕として最も責任ある業務を遂行し、大阪支店から小樽支店と福島支店までの明治期日本銀行の新築工事に関与した。

岡田信一郎は、東京帝国大学工科大学建築科を卒業(明治39年)し、東京美術学校講師をしながら日本銀

行嘱託となった。辰野金吾が日本銀行小樽支店の設計にあたって同行生え抜きの技術員ではなく兼務の岡田信一郎を設計者に抜擢した理由は、教え子の中でも極めて優秀な成績で卒業(恩賜賞受賞)した彼の設計とデザインの能力を求めたためと推察される。

次に、東京職工学校と工手学校の卒業者をみれば、日本銀行入行時は技手であったが後年技師へ昇任し、建築設計組織の一翼を担った。

東京職工学校(現東京工業大学の前身、明治14年創立)の卒業者は小林懋である。小林懋は日本銀行の建築設計組織において設備関連の業務に携わり、前述のとおり大正元年の建築組織解散以降も継続勤務した主要技術者の一人である。管見の範囲では、小林懋の日本銀行入行の経緯について詳しく述べられた論文がないことから、本研究で見出した史料をもとに略歴をまとめてみよう^(注24)。

小林懋は、文久3年(1863年)10月14日に生まれ、県立鳥取中学を卒業し、明治16年東京職工学校機械工芸科に入学、20年に同校を首席で卒業。直ちに特許局技手・審査官補として就職、23年に退局し東京特許代言社を創設。29年、辰野金吾の推薦で日本銀行に入行する。これは、東京職工学校の同級生・山崎久太郎が日銀を退行しドイツへ留学する代員としてであった。日本銀行では建築設備関連の業務に携わり、昭和2年に退職する。その間、大正期に日本銀行嘱託となり、大正7年には蔵前工業会の初代理事長に就任した。昭和4年8月30日、逝去。

工手学校(現工学院大学、明治21年創立)造家科の卒業生中で技師になったのは小林悉(明治23年7月卒)と小川彦七(25年卒)であり、小樽支店の現場監督を勤めた技手の瀧村敬明も明治31年の卒業である。このほか同校の卒業生は本店以来の建築業務に技手として携わり、日本銀行の中堅技術者として活躍している。

その氏名を列举すれば、山本鑑之進、山宮貞人、下條禎一郎(以上第1期卒業、明治22年)、中野清次、弓削鹿次郎(以上明治23年卒)、久保田小三郎(23年7月卒)、小原友輔(32年卒)、門政吉(35年卒)などが上げられる^(注25)。

鉄道局工技生養成所と攻玉舎を卒業したのは、岡田時太郎である。岡田は万延元年(1860年)唐津に生れ、明治12年に鉄道局試験に及第し2年間の修業を積み、後、帝国大学の建築現場に就き、攻玉舎を卒業する^(注26)。

VI まとめ

本稿は明治期日本銀行の建築概要と設計組織・設計者の変遷などを論じたが、その要点を以下にまとめる。

①本館の構造・規模・建築費：日本銀行の組積造による本館は、東京本店（明治23年～29年）に始まり西部、大阪、名古屋、京都、小樽、福島に建築された。工期は名古屋と京都、小樽と福島が重複するものの、基本的には竣工を区切りに次の本館を着工させたことから建築設計組織と技師の構成との関連性が見出された。小樽支店は本店、大阪支店に次ぐ新築費で建てられたが、その理由は日露戦争終結によって金融拠点として位置づけられたことが窺われる。

②建築設計組織：建築設計組織は、本店（臨時用度課・用度係・建築所）に始まり西部支店、大阪支店の臨時建築係まで当該地に開設され、それ以降解散（大正元年）までは本店用度係に設けられた。

③設計者：辰野金吾は建築工事監督または建築工事顧問として建築全般を統率した。本稿では、技師の陣容を組積造本館の建築と関連させて4期に大別した。第Ⅰ期は本店新築に際する岡田時太郎、井上工一、葛西萬司らであり、第Ⅱ期は大阪と西部支店新築のための再編期で井上工一、細野（片岡）安、長野宇平治、村井季四郎、小林懋（技手から昇任）が採用された。第Ⅲ期は技手から昇任した小川彦七（名古屋支店監督）、小林悉（京都出張所監督）が加わり、第Ⅳ期は長野、小林懋、村井に加え小樽支店の設計に岡田信一郎（嘱託）と福島支店の奥村精一郎で構成された。

④技師と出身学校：建築関連技師の延べ人数は11人であり、出身学校が判明したのは帝国大学（東京帝国大学）、工手学校、東京職工学校、鉄道局工技生養成所および攻玉社であった。辰野金吾はこれら学卒者によって日本銀行の建築設計組織を編成したのである。

以上、日本銀行本店から大正元年の解散まで、日本銀行建築設計組織と設計者の推移について論述した。これをとおして言えることは、建築設計組織は一貫して辰野金吾の影響下にあり、組積造本館の建築時期に合わせて辰野の教え子である学卒者を中心に技師の編成をおこない、わが国の主要都市に本支店・出張所を設計・建築したのである。

謝 辞

故遠藤明久博士、橋本昌之氏、伊藤大介博士（北海道東海大学教授）、初田亨博士（工学院大学教授）、藤岡

洋保博士（東京工業大学教授）、畑泰子氏（工学院大学図書館）、日本銀行および日本銀行貨幣博物館、小樽商科大学図書館、唐津市近代図書館の方々からご助言と史料の提供を賜り、ここに感謝の意を表します。

〔注〕

本稿は次の拙論を一部修正し、新たに加筆した。

「明治期における日本銀行の建築設計組織と設計者について」、北海道職業能力開発大学校紀要、第22号、2003年4月。「明治期日本銀行の建築設計組織と小樽支店(明治45年)の設計者－辰野金吾・長野宇平治・岡田信一郎－」、日本建築学会計画系論文集、第570号、2003年8月。

（注1）村松貞次郎：日本近代建築技術史、新建築技術叢書-8、p.68、彰国社、1976年

（注2）藤森照信：日本の建築 [明治大正昭和]、3 国家のデザイン、pp.111～135、三省堂、昭和54年

（注3）拙稿：日本銀行小樽支店（明治45年）の主要構造と仕様、日本建築学会計画系論文集、第471号、1995年5月。小樽支店の本館が本店に始まる組積造建築の構造と仕様を継承しながら新たな鉄骨構造とコンクリートの建築技術を導入したことを論述。

（注4）福島支店の竣工は大正元年11月であるが、着工明治44年8月、設計辰野金吾、長野宇平治、奥村精一郎であり、本稿では明治期日本銀行建築に含める。

（注5）明治44年6月1日、出張所であった京都、福島、広島、函館、金沢各店は支店に改称する。

（注6）『日本銀行八十年史』（日本銀行史料調査室編、p.250、1962年）によれば、「支店建物の多くは各時代の建築技術の粋を取り入れた堅固なものであったが、中には開設を急ぐあまり、既存建物の購入または借入れによったものもあり、また物資・労力の不足のために木造建築を余儀なくされた」と記す。

（注7）『日本建築士』『工学博士長野宇平治君追悼号』（第22巻、第4号、p.43、昭和13年4月）によれば、小原友輔が長野宇平治を追悼し、「38年の日露戦争当時銀行代理店の都合で広島出張所を急に新築することとなり大至急に設計の上工事に着手したが、其時は私と2人きりで仲々忙しく」と記す。

（注8）『建築雑誌』（第235号、明治39年）によれば、

広島出張所の本館建坪164坪、建築費合計29000円。『同』(第300号、明治44年)によれば、函館支店の本館建坪150坪、建築費合計90000円。

(注9) 第二建築(南分館)は設計辰野金吾と関野貞(身分は日本銀行に問い合わせたが不詳)、督役小川彦七(技手)、建坪120坪、工費凡5万円、蒸気暖房を備え(『建築雑誌』第145号、明治32年1月)、第三建築(東分館)とともに本館附属の建築である。本稿では両建築を「本館」としては扱わない。

(注10)『日本銀行沿革史 第十巻』(日本銀行沿革史編纂委員会編、大正2年11月、復刻、日本評論社、昭和51年)の新築費の記述は、本館のみの場合、本館と付属建物を合算した場合があり一律でないことから、本稿では新築費決算総額を比較する。

(注11)長野宇平治：故岡田工学士を憶ふ、建築雑誌、第557号、p.568、昭和7年5月

(注12)日露戦争が終結(明治38年)し、領有した南樺太に資金を輸送する拠点として小樽支店が位置づけられ、津軽・宗谷海峡を挟んで通貨を現送する役割を担った。日清戦争の際、北海道の航路が杜絶し、通貨の輸送が逼迫した経緯がある(『日本銀行沿革史 第一巻』、日本銀行沿革史編纂委員会編、p.594、大正2年11月、復刻、日本評論社、昭和51年)。また、『同史 第一巻』(p.621)によれば、北海道の経済と金融の勢力は小樽にあり、支店を函館から小樽に移転(明治39年8月20日)し、近接の札幌出張所を閉鎖(同年8月19日)して業務を集中させた。

(注13)『大正七年日本銀行営業報告』国立国会図書館蔵

(注14)前掲『日本銀行沿革史 第一巻』(p.512)の文書局沿革摘要によれば、文書局が本支店出張所の新築費の予算と決算に関する事務取扱を明治31年8月16日から担当する。

(注15)前掲『日本銀行沿革史 第一巻』(pp.447~448)によれば、臨時用度課処務仮規定「第五条 臨時用度課ハ本店ノ建築落成移店済ヲ以テ閉鎖モノトス」と記す。

(注16)前掲『日本銀行沿革史 第一巻』によれば、大阪西部支店臨時建築係規定(pp.609~610)「第二条 建築工事ハ一切日本銀行工事監督ヲシテ監督セシム」「第七条 臨時建築係ニ附属スル技術員ノ進退黜陟ハ日本銀行工事監督ヨリ之ヲ

申立ツヘシ」と記し、内規(明治31年11月4日)の職制(p.347)では「第三百七十七条 本行ニ行員、技術員及ヒ雇員ヲ置クモノトス 技師及技手ヲ技術員ト称ス」と記す。上記の第七条中「工事監督」は、当時、「臨時建築工事監督」の辰野金吾を指すと考えられる。

(注17)明治42年10月2日、文書局用度係から小樽支店長莊田茂三郎へ宛て、「貴店新築用「アスファルト」購入ノ件了承右ハ長野技師ト相談ノ上昨日倫敦代理店監督役へ注文ヲ依頼致候」と記す。

(注18)門政吉によれば、「大正元年7月31日に日本銀行の技術部が解散となり少数(ママ)の営業係を除き辰野、長野両先生を始め多くの技術員が高橋総裁より御用済解職の辞令を受けた」前掲『日本建築士』(p.31)。本店増築のため臨時建築部が設置され、昭和2年、長野宇平治は技師長に就く。

(注19)奥村精一郎の日本銀行履歴中に「技術部雇」の記載があり、また日本銀行建築組織の回想録で門政吉と関野清は「技術部」について述べている(『日本建築士』『工学博士長野宇平治君追悼号』、第22巻、第4号、p.155、p.169、昭和13年4月)。日本銀行に「技術部」の存在を問い合わせ、銀行史を調べたが、正式な組織名としての確認はできなかった。本稿では文書局に技術員が所属した分掌を「建築設計組織」と総称する。

(注20)『建築雑誌』第348号、pp.62~63、大正4年12月。「建築現場員は皆旧慣情実の如きは少しも知らざる純潔無垢の学校卒業生なり実地修業の専念を以て主任技師の指導を尊奉して毫も他を顧みず(略)従来大建築に免れざりし弊害は生ずるに間隙なく」

(注21)『建築雑誌』第236号、pp.542~543、明治39年8月

(注22)『辰野記念日本銀行建築譜』(昭和3年)によれば日本銀行建築所の技手として記名されていることから本店竣工後に再雇用された可能性がある。本館附属の新築では督役に携わる。

(注23)前掲『日本建築士』(第22巻、第4号、p.42、昭和13年4月)。()内は筆者追記。

(注24)小林懋の経歴は、藤岡洋保博士の教示による次の資料にもとづく。『人事興信録』第6版、大正10年6月15日。『蔵前校友誌』大正15年9月30日。『蔵前工業会誌』第309号、昭和4年10月1日

(注25)『工手学校卒業生名簿』工学院大学図書館蔵

(注26)日本之精華、毎日通信社、大正3年。清水慶一：

明治期における初等・中等建築教育の史的研究、
1982年

[参考文献]

- (1) 拙稿：日本銀行小樽支店(明治45年)の主要構造と仕様、日本建築学会計画系論文集、第471号、1995年5月。日本銀行小樽支店（明治45年）の主要構造と仕様、北海道職業能力開発短期大学校紀要、第15号、1994年。
- (2) 村松貞次郎：日本近代建築技術史、新建築技術叢書-8、彰国社、1976年
- (3) 藤森照信：日本の建築 [明治大正昭和]、3 国家のデザイン、三省堂、昭和54年
- (4) 日本銀行沿革史編纂委員会編：日本銀行沿革史、第一巻・第十巻、大正2年11月、復刻、日本評論社、昭和51年
- (5) 日本銀行史料調査室編：日本銀行八十年史、1962年
- (6) 『日本建築士』「工学博士長野宇平治君追悼号」（第22巻、第4号、p.43、昭和13年4月）
- (7) 『建築雑誌』第145号、明治32年1月。第235号、明治39年2月。第300号、明治44年12月。第348号、大正4年12月。第557号、昭和7年5月。
- (8) 日本銀行：大正七年日本銀行営業報告
- (9) 辰野記念日本銀行建築譜、昭和3年